

卷頭言

歴史は繰り返すというが、現在の自民党と民主党のマニフェストによるバラマキ競争を「昭和初期の保守二大政党のバラマキ競争のようだ」と言う人がいる。この二大政党の権欲が国民の信頼を失い軍部の台頭に繋がり、結果として未曾有の戦争があった。四年前、否小泉の登場からマスコミを含めて国民総白痴の感を強くしたが、今回も目に見えぬ「風」探しに国民総白痴状態になってしまいか。北朝鮮の核の脅威を利用して、首相その他に日本も核武装を辞せずと言わしめている醒めた人々の存在を隠すように。

阿部先生は短歌を詠む心構えの一つとして「目に見えぬものを見よ」と仰しかった。路傍の小さな花を美しいと思う。その美しさの本質はどこにあるのか。付近の様子、花の枝葉、空の色、風の色まで含めた美の中心に存在する花の美こそ、存在を越えた存在の美。私達歌人は無意識の内にそんな物の見方を身に付けて来た。そしてそこから物事の本質を見、言葉を紡いで来た。短歌を始めてから物の見方が変わったとよく聞くのはこの事を自覚する言葉である。

私達は今本当に重大な岐路に立っている。信頼出来ぬ政治家に一票を投じねばならぬ虚無を抱きつつ、それでもマスコミやある思维的集団に惑わされる事なく自分の信念を完遂する事は容易ではない。だからこそ歌人として培ったこの真実を、本質を見極める目を大切に今起きている物事を把握し行動しなければならぬ。その事が必ずや成熟した政治体制と国民本意の互助精神に満ちた国家を生むと私は信じている。

(高嶋)

太陽の舟 目次

三十一巻 九月号 (通巻二九七号)

わが愛する歌 — 名歌鑑賞 —

庄司 久恵

卷頭言

高嶋 邦彦

二十五首詠

玉川 愛子

阿部正路論 (第九十五回)

須藤 宏明

歌誌散見 (第七十一回)

豊泉 豪

作品Ⅰ

渡辺 幸子 他

七月批評 (作品Ⅰ)

佐伯 朋子

(作品Ⅱ)

多久和玲子

合 評 (座談会)

岩橋千代子・武田 節子

選者十首

森本 元昭・上田やい子

秀歌抜芳 (二九五号)

高嶋 邦彦

作品Ⅱ

土屋 道子 他

文法講座 (九)

奥田 清

歌帖余白 (六十九)

松岡 三夫

作歌の目・作歌の技法 (第五十六回)

三木 勝

歌会・支部報告 他

山田 (紀)・塚本・松岡

編集後記

山田 (紀)・塚本・松岡

題字

阿部正路

表紙

イラスト 阿部正冬

38 36 35 34 26 22 21 20 18 17 16 6 5 4 2 1

ふたたびの旅

玉川愛子

見えぬ先見ようと背伸びしてゐたり路傍の草は今日を生きゐる
心病むことは地図なき旅路なりその日暮しの色のない旅
看とらるる立場を知りて長病める人の哀しみ深く想ひぬ
髪を染め下肢にのこりし後遺症かくして行きし歌会まぶしき
生かされてゐしといふ事気づかされ病みてはじめて知る祈りあり
誰もゐぬ診療室に三年半の空白のありひっそりと佇つ
うっすらと埃かぶりし紙、机、色あせて貧し吾の心も
隣室より教育の場に疲れ病む先生と夫の低き声あり
野はいつも友なり師なり惑ひもつ耳にやはらかき土の声きく
はや出来ることは少なし病む者として病む人の心に添はむ

週二回かんさんと開きし診療室に職失ひて病む人の来し

「葉より今欲しいもの 働ける場所と少しの生きがい欲しい」

知的障害かるき幸ちゃん三十歳風のごと来てきままに話す

生活保護をやっともらへて来たといふ全身重きアトピーの青年

再訪時のわづかの笑顔うれしかり「ハローワークにこれで通へる」

窓近くなごりの雪をやはらかく受けとめて亡母の沈丁花かほる

不ぞろひの野菜と味噌の少し濃き夫のつくりし汁にやすらぐ

久々の全生園に父母とさかれし子らの「ちぎれし心」展観し

病者らと社会へだてし古垣の柊の白ほろほろ散りし

七十余年国の続けし誤りの史実は埋るるむさし野の森

親と子が夫婦が絆たちきられし流離の家族ら今はいずこに

園に出会ひし人みなやさし 盲の瞳も見ゆる瞳も同じものみつめをり

握手せし指なき変形しるき手のそのあたたかさ今も掌にあり

いつの世も差別 偏見をつくり出す人間のもつ闇のふかかり

ふたたびの細ぼそと歩む旅路にて賜りしものただありがたき

阿部正路論

須藤 宏明

―伊藤左千夫の浪漫―

伊藤左千夫は、例えば広辞苑で「子規没後、「馬酔木」「アラギ」などを発刊し、その写生主義を強調」と説明されているように、子規の提唱した写生を引き継ぎ、更に発展させたことで知られ、高校・大学での文学史の教科書でも、そのように解説されている。これはこれで、間違った捉え方ではない。しかし、阿部正路は、左千夫の

ゆく雲の雲間の星のまたゝきをまたず消えゆく現身の世や（「心の動き」所収）

という短歌をとりあげ、

従来の短歌史家たちは、伊藤左千夫を写生派の歌人としてせまく限定することにとらわれ、この「心の動き」に見られるような浪漫的な伊藤左千夫の歌にふれることはなかった。伊藤左千夫については、山本英吉氏や斎藤茂吉や土屋文明や春木千枝子さんらによる単行本としての論考があるが、浪漫派の立場からするとまとまった論考がないことが惜しまれる。今後の課題というべきであろう。（『和歌文学発生史論』昭和五十二年楓桜社一八八頁）

（ちなみに、山本英吉とは山本健吉ではなく、中央公論などの編集を勤めた左千夫研究者である。春木千枝子は、左千夫の兄の孫である。須藤注）

と、写生だけに限定することに警告を発している。これは、写生と浪漫、「明星」と「アラギ」が、そんなに簡単に図式的に二項対立の問題として考えられないという、阿部の深い思念に起因している。

「ゆく雲の」の歌のどのようなところが「浪漫的」であるのかという命題を、まずは検証しなければならぬ。「雲間の星」までは、実に細やかな写実である。だが、「またゝき」という言葉は比喩を含んでいると考えられる。「またゝき」には、twinkle（光のきらめき）とblink（まばたきすること）二つの意味がある。前者だと写実そのもののだが、「またず消えゆく」という述部とのつながりを勘案すると、後者であると読むべきである。まばたきをする間もなく消えるという、きわめて人間的な刹那感が、星に託されている。この刹那感を補強しているのが「現身」「世」である。星の光に、人間のまばたきという、まぶたを閉じてすぐに開く行為を重ね合わせて、刹那を歌っている。この点が、浪漫そのものなのである。このような鑑賞していくと、太宰治が好んだ左千夫の歌、池水は濁りににぎり藤波の影もうつらず雨ふりしきるも、写実に見えて、実は浪漫的な歌であると読むことができる。濁っている心に、容赦なく降る雨を、太宰は見ているのだろう。阿部の言う左千夫の「浪漫的」な歌とは、「心」「人間」を歌うということなのである。

歌誌散見 第七十一回

豊 泉 豪

「くれない」①

「くれない」は沖縄県糸満市で発行されている月刊誌である。二〇〇二年六月の創刊だが、これには長い前段がある。通巻五〇号記念号（〇六年八月）によると、創刊の二十年余り前に、玉城洋子を中心とする高校の教員仲間が集まって歌会が開かれた。「紅短歌会」と名づけられたこの会は、以降ほとんど休むことなく毎月続けられ、さらに年刊合同歌集『くれない』を刊行していった。合同歌集は、月刊誌の創刊時にはすでに十五集を数えた。そうした活動が積み重ねられた結果として、この歌誌が誕生している。

結社誌は短歌結社の機関誌として発行される。これを外から見た場合、雑誌を発行するための集団や仕組みが存在しているようにも見えるが、本来はそうではないのだろう。結社はさまざまな活動の一環として、会員の作品発表のための雑誌を発行する。インターネットを利用すれば、個人が不特定多数に向けて作品を発すること自体は、昨今余りにも容易になった。しかし、他者の感覚や読者の視線に思いを至らせることなく、自己の表現を安易に公にするという行為は、ろくに味見もせず、相手のことを何も考えずに料理を作り、食べさせることに似ている。短歌に限らず、そうした作品、文章

がネットの世界には多く見られるようだが、一方通行で独善的な自己表出に陥ってしまう危険性があるのは、いわゆるネット短歌だけの話ではなく、結社誌においても同様であろう。誰にでも創作が可能な、大衆文芸としての短歌にとって、実際に集まったの歌会であれ、ネットやメールを利用したものであれ、相互に作品を批評しあう「場」を持つことは極めて重要である。作品発表のみが目的化してしまうと、短歌は痩せる。「くれない」の創刊に至る長い時間は、結社と雑誌の関係性における一つのモデルケースを提示していると同時に、この結社の現在の底力になっているだろうと思う。

主宰の玉城洋子は、かつて「短歌人」や沖縄の「黄金花」（平山良明）などに所属していた。主な会員は玉城寛子、喜納勝代、仲村致彦、大城永信、古堅喜代子、伊志嶺節子などで、雑誌の企画編集は玉城孝重が行っている。B6判で概ね七〇ページ前後、〇九年七月号（通巻八五号）には、一人八首を基本に、四首から二二首までを二二人が出詠している。沖縄県在住者が多いが、大阪、東京など県外の会員も少なくない。また、会員によるエッセイのほか、長野県の「白夜」に所属する成沢未来のエッセイ風の前号評「書簡往来」が連載されている。さらに地元の歴史家による研究や、海外在住者のエッセイなど、異分野からの寄稿も続けられている。

歌誌発行以外の活動としては、毎年六月に糸満市で開かれる平和記念祭で、「短歌で訴える平和・朗読」と題する朗読会を行うなど、反戦平和活動にも熱心に取り組んでいる。

七月批評（作品Ⅰ）

佐伯 朋子

・咲きにはふ桜の近くブルーテント住む人のあり隅田川辺に

吉岡悠紀子

花爛漫の春を余所に、隅田川岸のブルーテントに住む、路上生活者へふと思いを寄せる作者の優しさが伝わって参ります。

・故郷の駅に停車す下車しようか惑ひて通過す娘の待つらむと

相羽 照代

郷里というものには、理屈抜きに身を引き寄せる不思議な引力があるものです。その故郷に列車が停車し、思わず下車したくなり惑ひ逡巡された胸中、共感を覚えます。

・明星の東の空に消ゆる時地より湧きくる水にほひたつ

石塚 立子

東の空が明るくなり、明けの明星の金星の輝きが消え、地表から水蒸気が白々と立ちのぼり始めた時、ほのぼのと水が匂い立つ大自然の息遣いを捉えられた、作者の豊かな感性を思います。

・そよ風に藤の花房蜜蜂を抱きて揺るるゆりかごのごと

上田やい子

春を詠まれた、美しくやさしさに満ちた歌が並ぶ中の一首。そよ風に揺れている優雅な藤の花房の中に、蜜蜂がいるのを見逃さず、「蜜蜂を抱きて揺るるゆりかごのごと」と見事に

表現され、メルヘンの世界へ誘われます。

・つねひごろ泰然として振舞うを羨ましくも親交深む

北川 昭

変わることなく誠実で温かであった亡き友を偲ばれた、「忘れぬ友」と題された七首の中の一首。泰然自若とした人生の処し方に、羨ましく思い乍らもいつしかその人間性の豊かさに触れ、次第に敬愛の念を深めるに至った心の動きが簡潔に表現されています。

・青紫蘇にネギシヨウガ添へ豆腐盛る白磁の皿の待ちてゐし夏

木村恵美子

純白の白磁のお皿と青紫蘇の鮮やかな緑、そして葱と生姜を添えた冷奴の日本の夏の味覚、涼やかで美しいです。

・阿修羅像うれひを含むその顔に仏像ならず少年感ず

河野 静子

阿修羅像は、その写真からも、正に少年の凜凜しさと深い悲しみの面差しに、強烈な印象の虜となります。

・その上の里人の影を慕ふがに白川郷に人波うごめく

佐田 孝義

合掌造りの飛騨白川郷を訪れ、養蚕に励んだ昔の村人達を偲ばれたこの作品の、上の句に詩的抒情を感じます。

・髪截りてこころの惑ひ断ちし吾に桜青葉の風わたりくる

須澤 溟子

髪を截って心の惑ひも打ち払い、さっぱりとして青葉風に吹かれられ、誠に清々しい風を感じる作品です。

七月批評（作品Ⅱ）

多久和玲子

・さよならのキッスの類にわか草のつかのま匂ふ希望のごとく
玉川 愛子

幼の成長は早く久しぶりに逢われたお孫さんはさぞ可愛らしかったことでしょう。作者の出会いの楽しさ、別れの淋しさを詠われ「希望のごと」と表現され妙です。

・うつつらと緑がかりし早稲田の雲の揺るるをさらりに裂く風
富永 道子

早稲田のうすみどりそれを裂く風、ふるさとの景色でしょう。か、日本の原風景を思わせ気が休まります。作者の今、落ち着かれた生活を偲ばせます。

・九十歳十八番のカラオケ艶やかに乙女心を歌っておりぬ
土方 澄江

作者の長寿の方を思われる優しいお気持が嬉しい歌です。「乙女心を歌っておりぬ」そして「艶やかに」よい表現です。

・知を知りて無知を知りる日日にゐてやなぎの萌黄限りを知るらず
三木 勝

学べば学ほど無知を知るといふ謙虚なお心を歌に詠まれる作者にさわやかさを感じます。そして自然に向けられる眼の確かさ、結句が生きています。

・合気道の練習をするかたはらを雄雉子が一羽ゆったり歩く
深谷 充代

牧歌的な景色が見えてきます。「雄雉子が一羽ゆったり」と

作者のきびしい練習との取り合せに面白さを感じました。

・デイゴ咲く公園化したひめゆりの塔の真下の洞窟しんと
村田 一江

かつての戦争で非戦闘員であった女学生が多く亡くなった「ひめゆりの塔」は当時同年齢であった私は忘れることは出来ません。ひめゆりの塔の付近は変わっても洞窟はずかにあの頃を物語っているのです。

・言はれたる病ひは素直に受け入れて共に過ぎむ余生といふを
宮井 富美

悟りを得たような歌です。共感できます。又「余生といふを」に説得力を感じますし同年齢と言っただけに安心感があります。人は年を重ねることによって次第に心素直になっていくものでしょうか。澄み切った心が表現されています。

・説明書の機能数多を読む難儀古炊飯器十日生きのぶ
村田 孝子

何げない事がらをとり上げユーモアのうちに詠まれていて共感を呼ぶ。又「十日生きのぶ」と救いを作られた作者に感服です。古炊飯器をあと十日使用することを「生きのぶ」と表現したところが心憎いばかりです。

・桑畑の芽吹きはたての霞立つ幻像のさまとほくなりたる
諸 幸子

かつてを思い出す農村風景は幼い頃の幻像か、共感を呼ぶ歌であり、ふるさと思うすばらしい抒情詩と思います。誰れの心にも棲んでいる昔の風景をいとしんでいる気持がよく表現されています。

合評

座談会

E 合評を始めます。今回は七月号から四首を選んで行います。最初は太田支部の山名恒子会員の

踏まれては地にはらぼふて咲くシャガに雨やはらかきひかりをそそぐ です。どなたからでもどうぞ。

H 繊細なひかりを歌うのが上手い作者ですね。シャガというのはあやめに似た薄い青い色の花で、日陰に咲く花。周りを歩く人に踏まれることがあるが、それに雨が柔かいひかりを注いでいる。雨を主にしているのが上手いと思いましたね。

Q シャガは手入れをしなくても咲いている清楚で強い花。雨の中で柔らかく光っている。作者の優しさが出ています。

B 確かに、下句は上手いです。でも、初句の「はらぼふ」は間違いで「はらぼひて」に直します。シャガは茎で広がって群生して咲いているでしょう。踏まれて腹ぼって咲いている所は、どうゆう所なのか、特別な地域なのか、情景描写が無いのでイメージが結べないです。

G 正岡子規の歌で「くれなるの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨の降る」のように、上句に導入部としてきちり具体がうたわれて下句へ続いていく。この歌も上句に場所とか具象があると下句が生きてくると思う。

B 釋超空の有名な短歌「葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり」のように「山道」がしっかり詠まれているので、読み手にはイメージが湧いてきます。このように場所とか状況を詠みこんで欲しい。

G 「小径」とか場所を入れれば良いし、これからは子規と渡り合う気持ちで詠んで欲しいですね。

E では、次は伊豆支部の今井芳枝会員の
山鳩が落ち葉を分けて近づきぬ草引く我もお前も一羽か
です。如何でしょうか。

Q ご主人が亡くなられて間もない方かな、と思いました。「落ち葉を分けて近づきぬ」が、良いと思いましたね。

H なにかにつけて孤独を感じない人はいないと思うのですが、山鳩一羽が近づいて来た、というのが良いです。私も孤独、お前も孤独かと、作者は詠んでいます。一茶的な発想と思いましたね。

B この歌は七首の連作の掉尾の一首だから、全体を讀んでいく必要がある。亡き夫への感謝や思いが、よく読み込まれていて、すごく良く伝わってきます。鳩が近づいたりすると亡き夫の分身が来たのではないか、というような詠み方をする人が多いと思うけど、この作者は違いますね。それから、結句の「か」は要らないです。「か」は詠嘆だけど、「か」を取り「我もお前も独り」と言い切った方が良い。

G そう言われてみれば、「か」は要らないね。これからは独りで生きて行く決意や強さのようなものが感じられる。

B この歌の持っている世界は、自分はまだ独りなんだ、と思いついて定めている、はっきりとした諦念だと思えます。なかなかいい歌であると思います。

E 三首目は、千葉支部の中村武光会員の
退職せし我らは夕餉済みたるに今帰り行く〈学童〉の子等
を取り上げます。如何でしょうか。

G 私は三句目の「に」は、説明的な感じがするので、要らないような気がするけど。

B この歌の場合「に」は、逆説の接続助詞なので「済んだのに」という意味だから必要ですね。

Q 退職なさった作者が、自分達は夕食が済んでゆっくりしている時に、帰っていく学童保育の子供達の姿を見て、こんなに遅くまで大変だなあ、と思って詠まれた歌と思いました。

B 学童保育の子供達は、親が迎えに来ないと帰されないのです、この歌は子供を預けて働いている親をも詠んでいる。

H そうですか。私は、塾で勉強してきて遅くなった子供達の姿を見て、教育現場への批判の歌か、と思いましたけど、違いましたね。

Q 私は学童保育のことは、よくわかりませんでした。小学二年生ぐらいまでですか。

B 六年生までですよ。私も学童保育に子供を預けて働いてきましたから。

H そうなんですか。私も始めて知りました。

B だから、この歌は自分達は夕食も済んでいるのに、夜遅く帰っていく子供達への思いやりと、預けている子供を早く迎えに行けない親の悲しみと両方詠まれていて、作者の持っている優しさと真面目さ、人柄が滲みでています。

G 〈学童〉すなわち学童保育の問題を詠み込んで、社会批評にもなっていると思う。

E 四首目は、千葉支部の加藤かず子会員の
こちよき言の葉耳を櫛りて埋もる春を起こせと迫る
です。どなたからでも。

B この歌は、七首の中の三首目の歌ですけど、連作として詠んでいるので、歌の背景を知って読むと、よく理解できると思います。

E 例えば、茂吉の「ひた走るわが道暗しんしんと堪へかねたるわが道くらし」の歌。敬愛する師の伊藤左千夫の死を知って島木赤彦宅へ駆けつける場面と知れば「しんしんと」という世界が深く読める。

Q 歌の背景を知らないのに「埋もる春」とは何かが解りませんでした。「春」というのは恋でしょうか。

B そう考えてよいでしょう。主人を亡くして三年の作者は若い娘から、こち良い言葉を言われ「埋もる春を起こせ」と迫られた。だけど、自分の気持としては、そう言われれば言われるほど「埋もる春」を起こす気にはなれない、と逆説的に言っているように読めます。

H この歌は心理詠ですね。「迫る」という言葉から作者の気持が理解できますね。

B 短歌は容量の多いものではないので、短歌を解釈する場合二通りあって、一つは一首独立として鑑賞できる歌と、その歌ができた背景を理解してからでない鑑賞出来ない歌とがある。加藤さんの歌は後者のタイプです。

G 一首だけを純粹に詠めばこち良い言葉とは、人間にとって生きる力を呼び起こす働きがあるんだ、という感じを持ってましたね。

E 本日は、短歌を鑑賞する場合その背景または作者について知ることの論が出ました。ありがとうございます。

(記録・山田紀子)

選者十首 (7月号より)

選者 岩橋千代子

昨日より今日のさ縁おしみつつ若葉風うけゆっくり歩く

八代 陽子

歳かさね未来とう世も狭まれど老には老の羽搏きあらむ

山田田鶴子

☆越後路の春は短し雪消えのなだりを染めるかたくりの花

湯本 いと

空わたる風の音きく薄明に過去なる日々が光を帯びぬ

石塚 立子

映りあふ証萌芽と赤まんさく奏つる花の陽春讃歌

奥田 清

萎へし花黄ばむ下葉を摘む朝捨つる朝はいつも寂しい

川村 貴美

筍の茹で上がりゆく香の中に四月の風の妖精過ぎる

鈴木 薫子

嬰兒は小さきこぶし振り上げて喃語を話す口をとからせ

深谷 充代

長寿よりより良く生きることこそと願ふ気持が闇を超え行

三木 勝

く
駅前スクランブルの人混みに押されて渡る思わぬ方に

森 五貴雄

選者 武田 節子

☆越後路の春は短かし雪消えのなだりを染めるかたくりの花

湯本 いと

日蓮のけさかけ松の三代目のどけき空に新芽伸びゆく

吉岡悠紀子

クローバーの花かんむりの幼子は右足ひだり足スキップ練

習 渡辺 幸子

無造作に束ねし髪は殺気だつ春の奢りの春落葉舞ふ

石塚 立子

春の野は危ういほどの萌葱色踏み入ることぞしばしたためら

う 上田やい子

吾と妻に生のよるこび告ぐるなり庭樹々はいま芽どき花ど

き 奥田 清

白鳥の着水するや春の川面波がゆっくり日差しけりゆく

込山 千代

葉桜の首夏しゅかに生れしが季も開けてうつろふ八十路のおのが

衰へ 志賀 倭子

☆植ゑつぎて幾世経たりぬ弘前の城に勝りし古木の威容

高崎 邦彦

森閑と物音絶えし山の道病院帰りの老いのしはぶき

鶴来けい子

選者十首 (7月号より)

選者 森本 元昭

様々にアイデアを出し農業の未来にむけて青年ら起つ

山田 玲子

さすらいの心を運べたんばの綿毛をそっと空に放てり

上田 やい子

アトピーが大方癒えし十三の娘は母と背比べする

緒方 善丸

花の名を花は知らざりほの白きどくだみ開く祈り待つがに

木村百合子

その上の里人の影を慕ふがみ白川郷に人波うごめく

佐田 孝義

☆植ゑつぎて幾世経たりぬ弘前の城に勝りし古木の威容

高崎 邦彦

きさらぎに横浜埠頭散策すふと気がつけば婚五十年

角田 順子

文明の利器に馴染めぬ心友と吾筆かろがると文交したり

原武 寿子

川沿いに桜のトンネル続く道リュックの列に花吹雪舞う

丸山孝一郎

ゴミ眺め分別の仕方ままならずまどいまどいて仕分表見る

森 五貴雄

選者 上田 やい子

老犬は終日庭にねて暮らす同じ様なるこの身悲しも

渥美 崇子

明星の東の空に消ゆる時地より湧きくる水にほひたつ

石塚 立子

海見ゆる珈琲店で詠む為の至福の時間は三百円也

君塚 一雄

老夫婦春の一日苗代の種時きをする櫻満開

菅谷 孝子

☆植ゑつぎて幾世経たりぬ弘前の城に勝りし古木の威容

高崎 邦彦

繭を煮る匂ひたたせて日だまりに妣は日がなを絹糸紡ぐ

月田 藤枝

天と海巡れる山も溶け入りぬ青一色の天橋立

照山 好子

薄日射す斑まだらの山は目覚めて枯れ葉の床に草の芽抱く

梅野 蒨

天井の木目が見てる 右側へ少し傾き安心の位置

原田 寛

人気なき朝の鬼怒川船着場初夏の微風に船もくつろぐ

吉田 昌夫

山林の木漏れ日注ぐ散歩道人は自然と解け合いており

梶川喜與志

「瑞泉郷」と題する巻頭二十五首詠の掉尾を飾る一首。大仁瑞泉郷は「地球を一つの生命体と考え、永続性のある自然循環型農業を推進するために昭和五七年に開設した「大仁農場」を中心に約三十万坪の敷地内には「統合医療」を実施する「奥熱海クリニック、療院」、教育関係者に好評の酪農教育ファーム（大仁牧場）をはじめ団体や企業の研修宿泊施設として利用されている「研修センター」、観光客に大好評の自然食レストラン、売店、小・中学校での利用が多い体験学習（体験プログラム）施設等々から成り立っています。」とパンフレットにはある。又四季花が絶えないと言う。平成十八年八月二十七日、夏季全国大会で伊豆支部のお世話になり、この瑞泉郷も案内して戴き、その自然農法とそこで働く方々の純粹無垢な姿に深い感銘を受けた事が忘れられない。この二十五首詠は私が感銘を受けた方々の思いが作者の心と言葉を借りてそのまま歌になったものと今改めて深く感動する。抜芳歌は瑞泉郷の理想の中で、ここに生きる人のみならず、訪れた人も皆自然と融合して美しいと言う。エコ・エコと喧びすしい昨年、私達はもう一度この原点に立ち返る必要があ

るのであるまいか。
越後路の春は短かし雪消えのなだりを染めるかたくりの花
湯本 いと

越後は作者の古里であると言う。越後は雪深く出稼ぎが多い。水上勉の「越後つついし親不知」はそんな越後の悲劇。私も能登へ帰る時、親不知子不知の難所をいつも通った。抜芳歌はそんな雪深い越後の短い春を待ちかねた様に咲き盛るかたくりの花の生命力を見事なまでに表現した。近年は乱獲や盗掘、土地開発などにより生育地が激減している。残したい日本の風景が今短歌に残された事がうれしい。

ファイナイダー覗き動かず定めいる人も千鳥も干潟の景色
渡辺 幸子

千葉県習志野にある谷津干潟。ラムサール条約湿地でもある。そこに生きる千鳥とそれを見詰めるカメラマンが見事な程干潟の景色に溶け合っている。人々が大切に守ろうとしている干潟だからこそ、人と動物の住み分けが美しい。そこに作者は感動した。しかし読者は更にそれを見ている作者の存在にも気付かされる。あるいはその目はもっと高い次元の鳥瞰であるのではなからうか。何事も危険感無しの日本民族豚インフルを侮るなかれ

飯塚 裕子

前々号 (295号) 秀歌抜芳

豚インフルエンザ名は、養豚業者に不利益であると今は新型インフルエンザと呼ぶ。八月に入つて、ついに日本でも三人の死者が出、冬に流行すると高を括っていた政府もついに大流行の恐れと発表せざるを得なくなつた。作者の三ヶ月前の指摘は正しかった。炯眼である。私唱歌詠みは、常にこの様な鋭い感覚を持ちたいものだと改めて実感させられる一首だつた。

乳色の雲のあはひの薄ら陽をたもてる如く池は静もる

井上萬里子

洗足池の一瞬の静寂を切り取つて見事。今年三月三十日、太陽の舟短歌会二十八名の参加により洗足池池畔の吟行と風致会館にて吟詠歌会を開催した。抜芳歌はその時の一首である様だ。「桜見むと来し洗足池柔かき日射し嬉しく背筋を伸ばす」が出詠歌である。抜芳歌の柔かき日射しは雲を通した薄ら陽であり、嬉しさは薄ら陽を保とうとする池の静寂である。二首の共鳴は相まって二首を深めるのだった。

水に入れしはまぐりひしと閉ざしをり貝には貝の抗ひあるも

木村百合子

貝を水に入れるのは砂出しの為。海水程度の濃度に塩を入れる。多くの貝は砂を吐く為に「した」を出す。しかし中には「した」を出さず殻を頑なに閉ざした奴がいる。人間界を見てる様ではない

か。何事にも右へ倣えが横行する昨今、この様な姿を見るのは小気味良い。作者の目は閉ざした貝の生き方を容認してやさしく、自らの命に忠実であらうとする意志を感じる。

人間の気配に同ずる風もなく啄む雉の目に鋭し

小林 絢子

雉は日本特産の鳥。日本鳥類学会で国鳥に選定されている。子供の頃田舎では良く見掛けたが、段々と見掛けなくなつた。鴨川に越して来て時々見掛ける様になつた。懐しい気持になる。抜芳歌の雉も野性の雉。人間をまったく恐れず、時に鋭い目で人間を見る。それは自然界で生きる為の力。肉体を武器として生きるものの本能。人間だけが失つたその激しさを作者はじつと見て動じない。

喘ぎつつ登る八十坂唯一の自信の健脚衰へ痛む

志賀 倭子

必死で八十歳まで生きて来た。その生を支えたのは二本の足。それがリンパ液の流れの異状にむくみ痛む。生きる力の根元が揺らぐ事への不安と悲しみは想像に難くない。私の義父も八十六歳。長い肉体労働は膝をむしばみ、その痛みに耐えて生きているのは辛いと言う。肉体の苦痛は心の崩壊へと繋がる。人類が経験した事の無い長寿社会に入った今、老いの真実を歌う事も歌人の大切な仕事なのではないだろうか。

老夫婦春の一日苗代の種蒔きをする櫻満開

菅谷 孝子

最近苗代で苗を育てる人が少なくなつた。多くはハウスの中で、機械サイズの容器に入れて育てる。稲作が機械化され、農家は機械の支払いの為種を作っている。機械を共同使用しない農業協同組合とは不思議な存在だ。作者はそんな農家ではない。昔ながらの手仕事で大切に苗を育てる。老いても二人の共同作業の喜びが「櫻満開」でひしひしと伝わって来る。

電車での学校通い孫知らぬ影武者となりて一ヵ月過ぎ

辻本わか子

最近日本の小学校で起こっている統廃合は、少子化による非効率を改めるのが目的で、子供の事は何も考えていない。私は小学校は歩いて通える範囲を守るべきだと考えている。子供は地域で守ってこそその宝。それが今は遠方までの電車、バス通学。抜芳歌の様な苦勞を強いる事となる。もう一ヵ月も続けていると言う。それも影ながら見守ると言う最も辛い作業を。愛すればこそ。為政者への怒りが込み上げて来る。

寒き日に神田明神祝詞あげスキーに直行婚五十年

角田 順子

「金婚式」と題する七首、全て結句は「婚五十年」。実質歌われている世界は五十年間の記念碑的出来

事。しかし作者にとって思い出の全ては五十年共に生き金婚式を迎えたと言う喜びと満足感と少し

の自分への愛惜に色どられたトータルな感慨なのだ。そんな五十年の思い出の中でも特に結婚式直後スキーに直行するドラマに、最近の海外結婚式以上の感動を覚えるのは私だけであろうか。

ま盛りの連翹折りきて函を満たしモコ見納めのはこの蓋閉す
土橋 茂徳

「モコ昇天(その一)」と題する七首、六年も共に生きた愛犬モコの臨終を描いて胸を打つ。抜芳歌はその掉尾の一首。人間より生の短い動物を飼うと言う事はその死を看取る事を意味する。私はそれが嫌で動物を飼わない様にして来た。「苦しみの鳴きもありなむ耳遠く書きぬて終のこゑを気付かず」私は妻の実家で犬の断末魔の声を聞いた。作者はそれに気付いてやれなかった事を悔やむ。そして連翹の花を満たして死出の旅に出す。心が痛い。

ぬかる田の畦塗る男の一瞥の陰しさに遭ふ背の丸みに

富永 道子

田起しの後、「くろ」をやると言う。「くろ」とは「畦あぜ」の事であると知ったのは辞書を調べてだった。畦を田の土で固めて水を溜める。鴨川に来て抜芳歌と同じ情景に出会った。散歩の途中だった。「この仕事が一番きつい」老農夫の言葉だった。

前々号 (295号) 秀歌拔芳

結句「背の丸み」に男の年齢が表現され、だからこそその厳しい労働に耐える男の目は険しい。見事な観察力だ。あるいは作者は農業を知っているのか。ちなみに水張田を耕し苗を植えるようにすることを代掻きと言う。

清明な風が新緑の木々にふく街全体がすきとおっている
野村富久子

「清明」とは（清く明るい気が満ちる意）十四節氣の一つ。太陽曆の四月四日頃にあたる。（広辞苑）単に清く明るいだけで清明を捉えるのではなく、そこに季と氣を加えて読み取った時、新緑を渡るその風は見事なまでの澄明さを伴って作者の心の中を吹き抜けて行く。そんな心で見た街は隅隅まで透き通って見える。心が目になる瞬間がそこにあった。

パソコンも携帯電話も持たぬ吾の傍ら常に本がありた
松本 昭子

テレビを除けば、外界との接点の大部分を持たない事を意味する。テレビは受動的であるが、パソコンや携帯電話は能動的だ。そしてこれ等は習慣化し中毒化する。私は現代病の一種だと思っている。そして人は慌しい時間の流れに組み込まれて日々を過ごす。周囲が皆そうだからこれを異状だとは思わない。今こそ私達は間愈っこいぐらいい立ち止まる必要がある。そうすればそこに本があ

る。作者の生き方に共感する。
過ぎ来しに悔ひの無きこと幸ひと空の蒼さに深呼吸する
宮井 富美

「氣力だけは失せぬを幸と受け留めてひと日ひと日を楽しみてゐる」と連動する。作者は今外出もままならぬ程に体調を崩している。しかし子供達に愛され励まされ、心は十分に満ちている。素晴らしい事だ。自分の人生に悔いを持たぬ人は幸いだ。こんな晩年を生きられたらと、我が身に置き換えてみるが、私には無理なようだ。結句の「深呼吸」の中にあるいは多くの悔いが納められているのであろう。

青い空白い雲とぶ沖繩の車線に沿って米基地続く

村田 一江

沖繩に鉄道は無い。島を米軍基地が寸断している為鉄道を通せないのだ。頼る交通手段は自動車だけ。最近、那覇空港から首里まで三十分弱のモノレールが開通した。そして道路の多くは、米軍基地の金網に沿って走っている。今もその道路の下には多くの戦死者の骨が埋まっている事を知っているが、戦争の無惨さと基地のある悲惨さを嫌悪感させられた。青い空と白い雲が美しいだけにその惨は殊更に深く重い。

文語で短歌を詠む人のために (九)

奥田 清

形容詞

いつものように、国語辞典の国文法要覧を参照してください。形容詞とは、自立語で活用があり、単独で述語や修飾語となることができ、基本形が「――し」の形をとり、(口語――い)。意味のうえでは、事物の性質や状態を表わす単語である。

「白じろと明け来る空に①細き月かかりてひと日の頁を開く」
 「遠ざかる足音に覚むる夢一つ疼きにも似し春の②かぐはし」

右の例歌の①細き、②かぐはし、を活用表にまとめる。

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
細し	細	から	かり	し	き	けれ	けれ	7活用
かぐはし	かぐは	しく	し	しき	しき	しけれ	しかれ	シク活用
		しから		しかる	しかる			

右のように、語尾が、く・く・し・き・けれ・と活用するものを「7活用」といい、しく・しく・しき・しき・しけれ、と活用するものをシク活用という。見分けるには、連用形に動詞「なる」を続けてみて、「細くナル」「かぐはしくナル」シク活用。「清くナル」「美しくナル」。

皆さんも経験がおありかと思うが、初心の頃、「悲し」「寂し」「うれし」などの形容詞を安易に使うな、そう感じた中身をもって具体的に歌にした方がよい、と言われたものでした。で、私は「坂徑を悲しみに堪えて背負ひ来し兄の墓標を池の辺に置く」の原作を推敲して、「坂徑を堪えて登りて背負ひ来し兄の墓標を池の辺に置く」とした。昭和二十六年「アラギ」に投稿、土屋文明に選された。これは一応成功だったと思うが、だからと云って、単純に一首のなかに思いや感情を表わす形容詞が入っている、いけないというわけではない。

文学にあこがれしゆゑ貧しかりきせつなかりき清かりきわが馬込村(阿部正路・火焰土器)

三つの形容詞は、「創設者」の「青春の日々を」象徴させるひびきをもって訴えてくる。生活状態・精神及び身辺のありよう。そして、滾る情熱などが聴えてくるのである。

次は、石塚立子同人の「風待ちて翼は」よりの引用である。石塚同人は、「見えないものを見、人の感じない瞬間を感じることでできる歌人」と評されるが、形容詞の使用にもその感覚の芽えをみることができる。

- ・目線低く西行の座す庵より吉野の空の深き沈黙
- ・思ひ出を辿れば刻を閉ぢ込めし赤き月影水底に満つ
- ・羽ばたかぬ翼の中に育みし青き記憶の強き嘴打ち
- ・見上げる新宿の空 魚棲まぬ赤き満月重く漂ふ
- ・届かざる夢と思へば幻の春ま寂しく逃げ水を追ふ

歌帖余白（六十九） — 編集雜記 —

松岡三夫

偶成

朱熹（晦庵）

少年易老学難成 少年老い易く学なり難し
一寸光陰不可輕 一寸の光陰軽んず可からず
未覚池塘春草夢 未だ覚めず池塘春草の夢
階前梧葉已秋声 階前の梧葉已に秋声

人口に膾炙されている朱熹の詩です。「少年老い易く学なり難し」とは今まで幾たび繰り返してきたことか。まさしく少年のころ、青年、壮年、そして老年のいま。「未だ覚めず池塘春草のゆめ、階前の梧葉すでに秋声」まことに実感。桐一葉落ちて天下の秋を知る思いです。

朱熹は、一一三〇年九月十五日、福建省南劍州に生まれ、詩人としてより儒学者として知られています。朱子と尊称され、儒学史上、空前絶後の組織哲学、いわゆる朱子学を建設した「新儒学」の創始者。江戸時代の藤原惺窩、林羅山などに影響を及ぼし日本の朱子学派を形成します。

天地は物を生きしめることを心としている。気に陰陽があり、物に盈虚はあるけれども、天地のこの心は、古往今來、一瞬の間断もないのである。

血気の怒は有るべからず。理義の怒は無かるべからず。

（朱子語類）
（孟子集注）

中学生時代に読んだ漢詩三題として、陶潜の「盛年不重來一日難再震 及時当勉勵 歲月不待人」と积月性の「男兒立志出鄉関 学若無成不復還 埋骨何期墳墓地 人間到處有青山」と朱熹の「少年易老学難成」が上げられるが、やはりトッブは朱熹の「偶成」ということです。

さて、漢詩にもヨーロッパの詩にもあるのが脚韻。日本の詩だって、脚韻くらいふめますし、と荒川貴之氏。朱熹の「偶成」を次のような日本語

学ぶ間もなく すでに老年
早さ 困惑 時は有限

草木 萌え ふと 眠気 さす 春
目覚めてみると もう秋になる

の詩に見事に直します。日本では、古代から漢詩の伝統があり、脚韻の意識は古くからあったから、和歌や俳句における脚韻について研究されることもあったものの、それが脚韻詩だと意識されたことはまったくなかったとみてよい。

詩では、九鬼周造などが、一九四二年にマチネ・ポエティックという若手詩人の朗読会を結成したとき脚韻詩が本格的に始まったとされています。福永武彦、加藤周一、中村真一郎、白井建三郎、窪田啓作ら十人が参加。その成果が一九四八年刊行の『マチネ・ポエティック詩集』。

日本語脚韻詩絶望論を唱える浅見秀雄は、それでも
我が想い出の里の山 叫べば君の名こだま

ともに見つめし山の四季 幼なじみの君なりき
「野菊のごとき君なりき」の冒頭で詠むのです。

作歌の目・作歌の技法（第五十六回）

太陽の舟短歌会千葉全国大会を終えて

三木 勝

千葉一宮での全国大会を終えて、数日後に会員の方からお葉書を頂いた。「お勉強とともに、見学、新しい出会い、みなさんのお心づかいもいただき、たのしい思い出を一杯抱いて帰ってまいりました。」と記されていた。全国大会の目的と太陽の舟短歌会の目的や機能が、要にして簡にまとめられている文章であった。全国大会では、見学や出会い、互いの心遣いなどを通して、一泊二日を共に過ごした喜びを共有して、そしてまたそれぞれの日常へと帰っていく。楽しい思い出を抱いて。

年一回の全国大会は研修・勉強の場であり、支部を越えて、誌上で毎月お会いしている方々との交流の場でもある。年一回の全国大会は、このような機能を通して、各支部、各会員に一年間の行動の指針を与えていく。全国大会の中で私たちは、一年間の活動のための鋭気を養っている。太陽の舟短歌会各支部の自治的・自律的活動は、毎月の各支部歌会の活動などで地道ではあるが、確実に根をはり、年々活性化の方向に向かっている。太陽の舟短歌会は各支部の活動の上に存在している。支部には隆盛の時期と沈滞の時がある。それ故に会員相互の交流と助け合い、支部と支部との交流と助け合いは、大切であり必要である。

太陽の舟短歌会は、昭和五十二年に創立宣言を掲げ発足し

た。編集人岸田寛の夭折により、平成九年十二月号「最終号」（通巻175号）をもって、第一次太陽の舟短歌会は幕を閉じ、その後、青翔短歌会と合流、ナイル短歌工房を結成して、短歌誌「ナイル」を平成十年一月号をもって創刊とした。翌平成十一年六月号（通巻十八号）をもって、「太陽の舟」のメンバーは「ナイル」にわかれをつげた。

そして同年八月一日をもって第二次太陽の舟短歌会の短歌誌「太陽の舟」を発刊した。この号の特集は、「都野正太郎碑建立記念の旅」であった。都野正太郎は、死してなお、太陽の舟短歌会を助け続けていた。彼の歌碑建立を軸として、太陽の舟短歌会の人びとは、再び集まり結束し、この旅を通して、集団として、ナイル短歌工房にわかれを告げ、再び太陽の舟短歌会の旗を掲げる事を確認した。「ナイル」時代の十八ヵ月、私たちはいくつかの支部を失い続けていた。それはナイル短歌工房の歌壇中心主義、歌壇への進出の欲望、そのための「中央尊重、地方切捨て」にもとづく方針のためであった。会員一人一人が尊重されることよりも、歌壇にデビューしその階段を昇っていくことを優先するという方針のためであった。これ故に阿部正路高崎邦彦は「ナイル」に別れを告げ、再び太陽の舟短歌会として結束する決心をし、歌碑建立の旅（平成十一年四月一、二、三日・二泊三日）同行の人びとと相談し、その決心を固めた。（この間の事情は、第二次「太陽の舟」の実質的な創刊号となった平成十一年八月号通巻百七十六号の「新生への旅——萩笠山紀行 志賀倭子」で感動を込めて語られ、高崎邦彦、塚本正子他もこのことを

記している。)この事を受け、ナイル短歌工房を退会することとなった。これに関する資料をここに転記し、資料として残しておくたい。

《転記資料》 第二次「太陽の舟短歌会」発足に向けて

四月二十九日(午前) 阿部邸より正式に六月末日を以って

ナイル退会を甲村氏へ通告。

同日 (午後) 柏「力車宇」に於いて今後の諸問題

について話し合う。

参加者 阿部・原田・三木・野本・高崎

五月八日 東京歌会に於いて合議の上、活動を開始する。

五月中に行うこと

1、ナイルへの退会届の提出

各支社単位で取りまとめて提出してください。提出用

紙は準備します。

提出先 甲村秀雄氏 住所・・・(省略・筆者)

(ナイル会費は六月分まで完納のこと。それ以降納め

た方は返金します。)

2、太陽の舟入会届の提出 各支社単位で取りまとめて提出

してください。提出用紙は準備します。

提出先 阿部 正路

〒277-0082 千葉県柏市緑ヶ丘2219

3、各支部の充実を図ると共に、支部員を確認し拡大する。

4、新生「太陽の舟」は月刊とし、八月一日第一号(通巻

一七六号)として刊行する予定。したがって八月号の原

稿締め切りを、六月第二土曜日までとする。

原稿送り先 高崎 邦彦

〒284-0001 千葉県四街道市大日118-27

★・歌は全員7首とし、会費等で格差を付けることはしない。

★・掲載歌は五十音順月送りとする。(八月号はアから、

九月号はイから、十月号はウから)

会費 維持同人↓二千円 同人↓千円 会員↓七百元

(ナイルに参加していた方はこのいずれかを選択してください)

投稿会員↓六百元 (投稿会員とは、支部に属さず、

したがって会の運営には直接参加しないが、各地、

各公民館等で短歌を創りつつも発表する場を持って

いない人々で、「太陽の舟」に投稿してくる人々を言う)

購読会員↓五百円

総会 毎年八月後半夏季全国大会を開催し、総会とする。

総会 は、最高の議決機関である。

本部歌会 毎月第2土曜日、代々木上原の東京歌会を本部歌

会とする。

原稿締め切り 九月号以降は二ヶ月前の十日とする。(九月

号は七月十日、十月号は八月十日となる)

原稿送付先 高崎邦彦 住所(省略・筆者)

太陽の舟叢書 欠番を補充し、第33編以降を続刊する。

組織図(省略・筆者。平成十一年八月号四十六頁に掲載済。)

右資料には第二次太陽の舟短歌会発足の精神が記されている。

この発足の精神が尊重されなくなった時、会は存在意義

を失う。

《訂正》3月号35頁6行目 運慶を慶運に。

歌会報告

本部歌会 7月例会 第354回

(月田記)

日時 7月11日(土) 13時～16時45分

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

司会 前半 生稲進 後半 北川昭

出席者 28名 出詠 29首

原田同人欠席のため司会を生稲同人と北川同人が前半、後半を受け持って7月の例会は行なわれました。

先ず高崎代表より二〇〇九年第十一回全国大会(千葉支部担当)の報告があり、今回参加者六十七名と最高記録を達成、盛会且つ有意義に終わったとの言葉がありました。

尚十月二十五日(日)～二十六日(月)には岐阜支部に於て紅葉の美しい飛騨路での吟行会が行なわれるので、多数出席して親睦をはかろうとも話されました。

阿部先生の歌(太陽の舟(青葉城付近))

・戦を憎むと言ひて絶句せり戦はぬ何の歴史ありしや

昭和四十四年盛岡にて御母堂が御逝去なされた頃の歌であること。(戦争を憎むと言ひて絶句せり)の上句絶句したのは誰か解らぬが真に戦争を憎む心は阿部先生御自身の感情であるとの説明でした。

高崎先生のとられた歌五首

・つんつんとみそ萩咲きし野であれば心の裡を明かしたくなり
高橋 和子

・若き日は出来ずに居りしを公然と妻の手をとり歩きし晩年
三澤誠之助

・手のひらに雨滴つかみて輝ける少女の瞳雨上るらし
井上萬里子

・一度だけ「お母さん」と鳴きし雄鶏の声をききつつ迷いこむ夢
宮原喜美子

・紅の濃きルージュ似合はぬ齡かとのぞく鏡に梅雨の暗がり
川村 貴美

・(生稲記)

日時 7月11日(土) 10時～12時

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

司会 生稲進

出席 8名 出詠 8首

従来、全国大会と新年会の月は会場の関係で支部歌会未開催でしたが、来年一月から開催することを決定しました。

今月は志賀さんと武田さんの七首詠について、各人自由に意見を交わし推敲を重ねたりして鑑賞しました。

水戸支部 支部長/長須 正文 (塩田記)

日時 7月12日(日) 13時～16時

場所 びよんど(男女センター)

出席 6名 出詠 12首

司会 塩田 秋子

長須先生のミニ講義は「若山喜志子」代表作―青嵐たうたうとわたる榛原を黒牛ひとつよこぎりてゆく―について。

次に歌会へと進み6名の小人数ながら言葉の使い方、調べの流れなど思うことを話し合った。①まず実景②次に想像力を拡げてうたう、と先生よりアドバイスを頂く。

・添削の詠草今日はもどるかと思文待つごとと落ちつかずをり

鶴来けい子

水戸支部 支部長／長須 正文

(塩田記)

日時 7月19日(日) 10時～12時

場所 岩間町公民館

出席 6名 出詠 10首

司会 深谷 充代

降るかと思うと陽光が照りつけ、梅雨明け宣言は半分早く夏休みの到来も早く、選挙も近いと、全体に忙しない日々だ。動中静の短歌の世界は私達の宝物。常磐線でゆったりと岩間へ行ってくる。

・戯れに埋めておきたるじゃが芋の収穫ありき煮もの一皿

岩橋千代子

品川支部 支部長／久保田昭江

(吉田記)

日時 7月16日(木) 13時～16時

場所 旗の台シルバーセンター

出席 4名 出詠 8首

司会 吉田 律子

この夏、最高気温を示す日中にも、何一つ不満なく集まる

仲間に、只感謝したい気持です。冷房の程よくきいた洋間に打ちとけた数時間がすぎました。

・マイツリー(ホサキナカマド)の白き花どこで咲きしや
パソコンに見る
吉岡悠紀子

街路樹のため幼い苗木一本を寄贈した吉岡さんの立派な心一同感心しました。植えられた若木をたずねて、写真を撮り、紹介してくれました。何ごとにも積極的で心温かな会員です。

柏支部 支部長／末次 房江

(石塚記)

日時 7月17日(金) 12時～15時

場所 アミューゼ柏

出席 11名 出詠 13首

司会 石塚 立子

梅雨の明けた蒸し暑い午後、三木先生をお迎えし、一首一首に御指導を頂きました。後半は「哲学をする短歌」より時間の許す限り講義を頂きました。

・箬しく英虞のゆふなぎ残照に波ちかちかと艶けく光る

山田田鶴子

・うすものの上着をとほす海風はすぎにしオへの傷を苛む

山田 紀子

千葉支部 支部長／原田 寛

(渡辺記)

日時 7月18日(土) 13時30分～16時30分

場所 穴川コミュニティセンター

出席 15名 出詠 18首

司 会 森 五貴雄

学校の夏休みも今日から始まりました。夏本番です。千葉一宮館での全国大会が無事終り盛会であったとの報告がありました。

歌会はいつともより出席者が少なかったのですが、じっくり真摯に意見交換が出来ました。同高点歌が六首でしたが、出席者の三人の歌を高崎先生の講評を添え記します。

・峰からの風ひんやりと背に肩に蔵王の神の降り来る気配
上田やい子

自然の中に神を感じる敬虔な気持をさりげなく詠う。
・風吹く日母に叱られ海岸で打ち来る波の行方を追った

原田 寛

少年の日の甘い追想。打ち来る波が良い。

・びょうき君診療結果は変わりなし次回検診まで そっとし
ずかに 堀井 英範

検査結果は変わりなし次回検診までそっとしてと添削
歌会終了後「マダムチャン」に席を移し、恒例の暑氣払い
を楽しみました。

お詫びと訂正

八月号

十五頁下段 四行目 誘で↓誘ひ

五行目 うらなで↓うらなむ

十九頁下段 十七行目 桜在る↓桜花在る

会員サロン

玉川 愛子

大風の吹いた翌朝、診療所の前に吹き寄せられたゴミを掃いていると、一人の老婦人が来て私に「あんたこのそうじのおばさん？」ときかれ思わず「ええ」と答えたら「早いねごころうさん」と広い玄関に消えた。何故か嬉しく箒に力が入った。四年近く仕事を離れていた間に周囲の人達にも変化があった。高齢者の多い住宅地で長年来ていた方が亡くなったり、子供の所へ転居したり、施設に入った方が亡くなったり、お別れも云えず心残りだった。が又次の世代が古い、いつのまにか見知らぬ人々が静かに座っていた。物は豊かでも、心は貧しく、弱者をかえりみないこの国で「老いて病む」ことがどんなに大変か不条理かを身をもって知っている人々だ。その内の一人八十九歳の独居の男性が「病む辛さ、生きがいは無し、国に捨てられずな」とつぶやいた言葉は心に沁みだ。掃除が出来ることに感謝です。